

全科協 *News*

vol.56

NO.5

CONTENTS

- P2 特集
- P10 海外博物館事情
- P12 9月10月の特別展等
- P14 事務局から助成事業のご案内
- P15 新規加盟館紹介
- P16 トピックス

| 特集 | Special |

新たな層の獲得に向けた取り組み



表紙の写真の解説は、P16 の「我が館の推しなモノ・コト」をご覧ください

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718

東京都台東区上野公園 7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9171

<https://jcsm.jp/>

新たな層の獲得に向けた取り組み

普段、あなたのミュージアムにはどのような来館者がいるだろうか。例えば、個人で訪れる大人、家族連れ、友人同士、学校団体など、日頃から利用している来館者を、それぞれのミュージアムが具体的に想定することができるだろう。また、アンケート調査などを通じて、そうした来館者層の傾向を把握している施設も多いと考える。

一方、より多くの人々に来館してもらうことや興味関心を持ってもらうことを目指す場合、これまで来館が少ない、もしくは、接点の少なかった新たな層に目を向けることが重要となる。そのためには、どのような層がまだ十分に組み込めていないのかを見極め、そのターゲットに合わせた取り組みやアプローチ方法を検討する必要があるだろう。

そこで本特集では、新たな層の来館や関心を高めるための事業に取り組んだ施設に、現場で実践されている取り組みや、アプローチ方法を紹介していただく。具体的には、博物館が薬局を活用した取り組み、自然史博物館におけるアートとのコラボレーション、未就学児を対象とした博物館資料の展示への工夫、科学館における大人向けナイトミュージアムを取り上げ、アプローチする場所やテーマ、対象（未就学児向け、大人向け）といった多角的な視点から事例を紹介する。あわせて、それらの取り組みを通じて得られた効果や、その後の展開についても共有していただく。本特集が、全国のミュージアムにおける新たな来館者層獲得への検討の参考に、ひいては、各ミュージアムの魅力やその価値を広く多くの人に届けることの一助となれば幸いである。

多摩六都科学館 学芸員 筋野 美穂

ドラッグストアで展示・イベント？

～博物館の関係人口獲得のための初めの第一歩～

千葉県立中央博物館
丸山 啓志

はじめに

現代日本社会では、様々な面で都市部と地方での地域格差が生じ、問題となっている。本稿では、文化的格差の一つと言える、博物館の体験格差を取り上げる。体験格差の解消に向けた取り組みの参考として、対象となる人々と博物館の関わり方を「関係人口」として整理する。そして、この関係人口を増やすために効果的な博物館活動の実施場所の一例として、ドラッグストアでの事例について紹介する。

1. 博物館における文化的体験格差の現状

現代日本社会の子どもたちには、文化的活動やアクティビティなどの多種多様な「体験」を「希望すればできる層」と「希望してもできない層」といった明確な分断があり、「体験格差」と表現される。これは、博物館も例外ではなく、年取によって来館率が異なることが示されている（今井，2024）。

そして地域や年取などの格差を背景とした、保護者や子ども自身などの情報収集能力の不足も影響し、こうした状況は、保護者から子ども、教員から児童や生徒などといった、次世代にも受け継がれる負の連鎖となっている。

一方、文化的体験を提供する場である博物館については、2023年に改正博物館法が施行され、新たな役割として、「地

域の活力向上のための関係と連携すること」などが規定された。博物館にも、社会や地域におけるさまざまな課題に向き合い、解決に向かう先進的な取り組みが求められているのであり、現代の社会課題の一つである体験格差に取り組むことは必然である。

しかし、コロナ禍を機にオンライン展示などの取り組みが普及してきたことで「関心はあるが来館が難しい人」へのアプローチは進んだものの、体験格差として情報からも取り残されている層に対してはアプローチできていないのが実情である。

2. 博物館における“関係人口”の定義

博物館が提供する文化的体験についての体験格差の縮小・解消を目指すことは、博物館と関わる人を増やすことに他ならない。そこでそのターゲット層を明確化するため、地域活性化等の文脈で使用されることの多い「関係人口」の考え方を取り上げたい。

一般に、「関係人口」とは、「交流人口と定住人口の間に眠るもの」とし、社会的には、「特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」としている（田中，2021）。

博物館との関わりを軸に考える場合、交流人口相当は無関心層を含めたライト層（例：博物館にあまり来ない層）、定住人口相当はコア層（例：ボランティアや友の会）と呼べる。

その間に眠る関係人口とは、広い意味でのヘビー層と名付けられる。ここで重要なのは、足繁く来館する層だけではなく、ネットで SNS のフォローや発信、ミュージアムグッズの購入といった、様々な形で博物館に対して継続的に関心を持つ層と定義する。(図1)

なお、第70回県政に関する世論調査報告における博物館の利用調査(千葉県, 2026)によると、千葉県立中央博物館の未利用率が約85%となっている。この結果は、衝撃的な結果である一方で、潜在的なライト層やヘビー層となりうる関係人口層は相当に多いことを示す。しかしライト層はもともと博物館に対する関心が低いと考えられ、新しいアプローチ方法を考える必要がある。

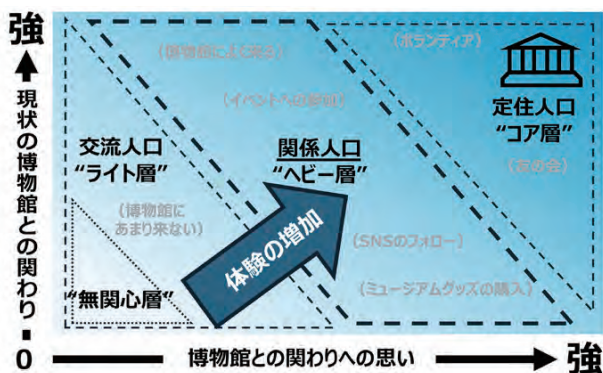


図1. 博物館における関係人口
(丸山・塚本, 2025)

3. 関係人口増加に向けて飛び出す博物館

一般的に、国立科学博物館や大阪市立自然史博物館、福井県立恐竜博物館など特定の大型館を除いて、博物館自体の認知度が低いことが多い。これは、多くの一般市民にとって、博物館が身近な存在ではなく、日常生活の視界に入っていないということが要因と考えられる。

このような事態において、博物館も認知度向上や直接的な表現でなされることはないが関係人口増加を目指した取り組みを行なっている。いわゆる出前授業や出前展示のように、博物館の外で開催される取り組みが該当する。

しかしこうしたイベントは多くが公共施設か、大型商業施設での開催である。公共施設での行事に参加する層は、もともと博物館等の情報にも触れているヘビー層と想定されるので、博物館との関係性の深化には役立っていても体験格差の解消という面での貢献は小さいと考えられる。大型商業施設での開催の場合も、公共施設よりはライト層の多い空間といえるが、大型施設であるがゆえにやはりイベントとして目を引かなければ、該当ゾーンまでライト層の人が足を運ぶことは少ない。

ここで、著者らが提案したいのは、体験格差解消と博物館の関係人口の増加の二つを目的として、一般市民の日常生活により近い場へ博物館が出ていくことである。具体的には、スーパーやドラッグストアといった日常生活に必要不可欠な場や、駅や空港といった市民の移動の要といった場である。

これについて、試験的な取り組みとして千葉縣市原市にあるドラッグストア内に設置されたコミュニケーションセンターでの出前展示を行なった(図2)。そこで、明らかになったのは、

千葉県立中央博物館の認知度の低さであった。千葉県下のドラッグストアで千葉県立中央博物館の認知度についてたずねたにも関わらず、約半数が知らないと答えたのは、先の千葉県(2026)の調査と整合的である。逆に言えば、その出前展示で千葉県立中央博物館のことをそもそも知らないライト層にそれだけアプローチできたということになる。彼らは博物館に係る文化的体験を経験したことはほとんどないと想定され、体験格差の解消に向けた取り組みとしての効果は大きいことが期待できる。



図2. ドラッグストア内施設での出前展示
@ウエルシア・コミュニケーションセンターいちほら
(丸山・塚本, 2025)

4. まとめにかえて

ドラッグストアでの取り組みは、博物館についてほとんど知らない層に対して博物館の展示を届けることができおり、博物館に関する体験格差の解消に一定程度寄与したと考えることが可能である。

今後の活動として、まずドラッグストアなど、従来と異なる日常生活圏での出前展示や出前講座といった博物館活動が、いかに関係人口を増やし体験格差の解消に寄与するのか、検証していきたい。そしてその際、ライト層に働きかけるには博物館をどのように価値づけするのが効果的なのかも、合わせて考察し、格差社会における博物館の役割を改めて考える契機としたい。

*本稿は、(丸山・塚本, 2025)を基に、全科協ニュースに合わせて、加筆修正したものである。

謝辞

本稿の事業の一部は、科学研究費助成事業：番号22K01021「来館の難しい人が博物館を楽しむための、チバニアンを用いた地域教育プログラム開発」の助成を受けた。また、本稿の執筆にあたっては、塚本明日香氏に大変お世話になった。そして、ドラッグストアでの取組みにおいて、峯川 大氏、澤田康裕氏、生木庸寛氏には大変お世話になった。この場を借りて感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 今井悠介(2024). 体験格差. 講談社現代新書.
- 2) 田中輝美(2021). 関係人口の社会学 人口減少時代の地域再

生。大阪大学出版会。

- 3) 丸山啓志・塚本明日香 (2025)．体験格差解消を目的とした博物館の関係人口獲得についての試論．地域志向学研究 Vol.9. p.32-34.

- 4) 千葉県「県政の主要課題_1. 県立中央博物館について」第70回県政に関する世論調査報告 (令和7年度) <https://opendata.pref.chiba.lg.jp/resources/46532> (2026年6月取得)．

特別展「自然史のイラストレーション」で見られた 新たな層への部分的広がり

大阪市立自然史博物館
横川 昌史

自然史のイラストレーション展の概要

2024年2月23日から5月26日にかけて、大阪市立自然史博物館で特別展「自然史のイラストレーション」を開催し、10,779名の来場があった。この特別展ではイラストレーション（以下イラスト）を「描かれた挿絵や図解のこと」と定義し、古い図譜、論文や図鑑に使われる精緻な線画、普及用の挿絵など、様々なイラストを展示した。総展示資料数は1,005点で、イラストに関する資料が88%を占めた。うち372点（37%）は様々なイラストの原図や一部複製、228点（23%）は図が描かれた書籍や論文で、これらが主力となる展示品であった。さらに、イラストを使ったミュージアムグッズが261点（26%）、特別展ポスターが22点（2%）も並んだ。標本はわずか81点（8%）で、当館でここまで標本が少ない特別展は前代未聞であった。

どのようなイラストが展示されたかは、ポスターに集約されている（図1）。権利関係をクリアできた展示予定のイラストを散りばめ、扉を思わせるデザインにすることで、イラストを通じて自然史博物館や自然観察への新たな「扉」を開くイメージでデザイナーさんに仕上げてもらった。



図1 特別展「自然史のイラストレーション」のポスター。
これらのイラストはすべて特別展に登場した。

展示は三部構成（図2）で、第一部「博物図譜の時代」では、明治期以前の本草書や古い書籍に掲載されている東洋・西洋の様々な博物図譜を紹介した。第二部「記載と図鑑」では、新種記載の図や様々な図鑑に掲載された図を展示し、正確に生き物を理解するための図の魅力伝えた。第三部「伝える・楽しむイラストレーション」では、友の会会員をはじめ当館に関わる方たちが、共に自然について学び、伝える中で描いてきた様々なイラストを展示し、楽しく伝わるイラストの工夫を紹介した。

自然史のイラストレーション展の狙い

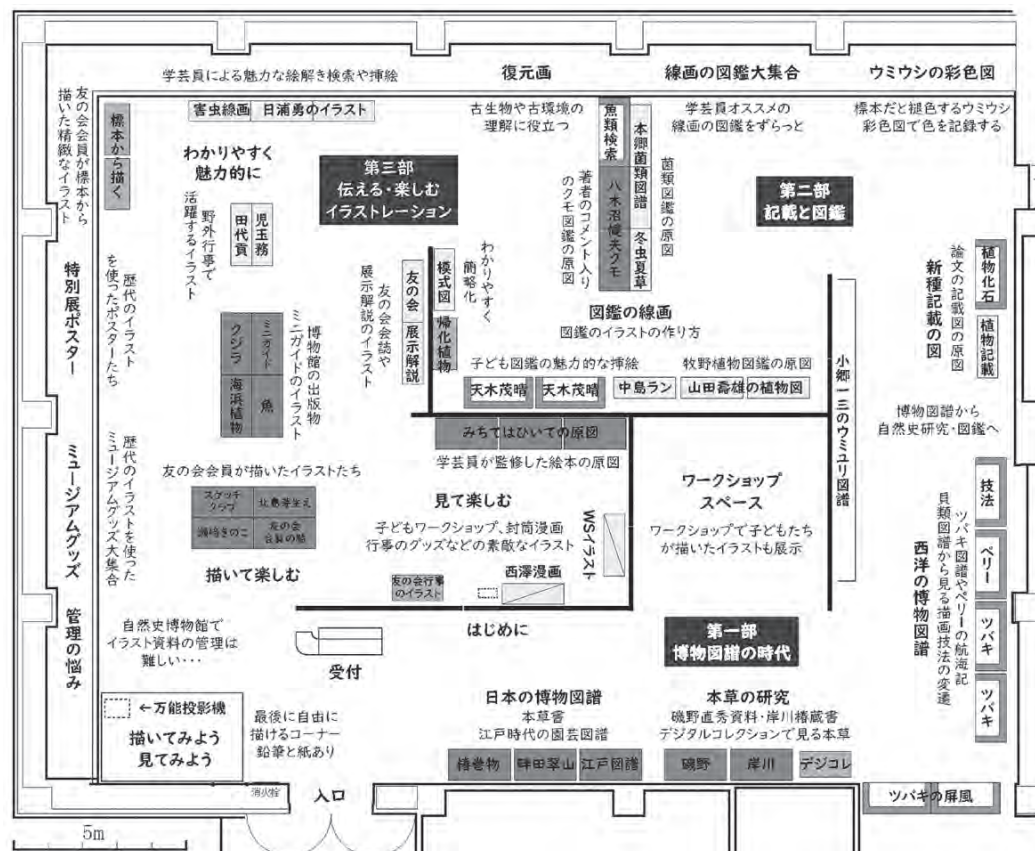
特別展の企画は当初、古い博物図譜や図鑑にまつわる図を中心とした内容で計画されていた。自然史に関わるイラストは、美しさなどの魅力だけでなく、描き手によって必要な情報が取捨選択されることで、写真とは違った情報を私たちにもたらしてくれる。自然史系博物館の学芸員であれば、線画の図鑑や比較の図解を見て、自然物の名前調べの解像度が一気に上がった経験があるだろう。誰しもがカメラ付きスマートフォンを持ち、気軽に写真を撮ってSNSなどで発信する時代だからこそ、そうしたイラストならではの強みと魅力を多くの方に伝える展示をしたいと考えた。

一方で、館内で様々な議論をし、所蔵資料を見直す中で、大阪市立自然史博物館らしいイラストとは何かを考えてみたところ、普及にまつわるイラストは欠かせないという結論に至った。友の会誌Nature Studyの古い号を開けば、様々なイラストを伴う解説が掲載されており、観察会に行けば、学芸員や友の会の世話役が描いたイラストが参加者の理解を助け、楽しみを大きくする。会誌発送用の封筒には博物館の近況を伝える「封筒漫画」が載っており、ミュージアムショップにはイラストを用いた魅力的なグッズが並んでいる。こうした普及活動でのイラストの役割を踏まえ、精緻な博物図譜から楽しいイラストまでを展示に展開し、新たなイラストの見方を多くの来場者に提示することを狙いとした。

自然史のイラストレーション展からの広がり

このような狙いで実施した自然史のイラストレーション展だが、定量的な評価としては新たな層の獲得に至らなかった一方、定性的にはいくつかの成果が挙げられている。

まず、特別展のアンケート結果や展示総括の資料を見返してみると、過去の特別展と比べて数字に大きな違いは見られなかった。イラストに関する特別展ということで、通常のアンケートの設問に加えて「過去1年で美術館に来館した回数もしくはアート系のイベントに参加した回数を教えてください。」という設問を加えてみた所、82%が「ある」と回答し、



1～5回が52%、6回以上が31%であった。当館への来館経験の設問では、過去の来館が「3回以上」と答えた方が66%であり、リピーターの来場者が多い中、美術館やアートにも興味を持っている方がかなり多かったことがわかった。これは新たな層の獲得とも言えるが、日頃から自然史博物館にも美術館にも足を運ぶ「ミュージアム好き」が多かったと解釈する方が妥当だろう。アンケートのクロス集計でも顕著な傾向は見られず、「美術館・アートは好きだが自然史博物館には来たことがない層」の大きな獲得には至らなかったと館内で総括している。

一方で、アンケートの自由記述やSNSでの反応を見てみると、日頃イラストを描いている方や、イラストを仕事にしている方の来場が多く目に付いた。こういった方たちの中には遠方から来館して下さった方もおり、自然史のイラストレーションという企画が創作活動をされている方に届いているという手応えを感じることはできた。また、「インターネットでポスターを見て、どうしても気になったが遠方で来場できないので資料をもらうことは可能か？」といった手紙をくださったケースもあり、いつもの自然史博物館の展示では届きにくい層に届くテーマ設定であったと言えるだろう。さらに「小原流挿花」という生け花に関する雑誌から展示紹介の寄稿を依頼されるなど、いつもとは違う反響を感じることも多かった。

数字としてこれまでの特別展との違いが出たものとして、中学生の展示室利用が挙げられる。今回の特別展は、小学生の団体利用（主に遠足での来館）が少なかった一方、中学生

の団体利用は相対的に多かった。総来場者数に対する中学生団体の割合は、過去10回の特別展の平均が1.2%（最小0.5%、最大3.0%）であったのに対し、今回は7.3%であった。遠足下見対応スタッフの感覚でも中学校教員の反応は良く、美術部での来館もあった。これは想定していなかった部分ではあったが、団体利用の中心が小学生である当館にとっては、新たな層の獲得と評価できるだろう。

日頃から自然史系博物館に来ている方が、様々なイラストに触れることで、自分でも何か描いてみる、他館に足を運んでみる、イラストや美術作品の見方が変わる、といった行動の変化も、別の角度から見た「新たな層」と位置付けられるかもしれない。こういった効果の測定はできていないが、期待はしていることである。

以上のように複数の手応えはあったものの、新たな層の獲得という点では課題も残った。「自然史のイラストレーション」といういつもと趣向の異なる特別展を企画する段階で、どういった層に対してどのように働きかけるべきかという議論はほとんどされなかったことは反省点である。いつもと趣向が異なる特別展を実施する際は、企画段階でターゲットを明確化し、広報やアンケート設計に反映させていくことが重要となるだろう。

最後に、特別展「自然史のイラストレーション」の事業報告は大阪市立自然史博物館館報50（令和6年度・2024年度）(<https://doi.org/10.20643/0002000220>)に掲載しているので、そちらも参照されたい。

なぜ PLAY! MUSEUM で「どうぶつ展」を開いたのか？

2022年秋の国立科学博物館、本館企画展示室。暗がりでも光を浴びた、美しい哺乳類の剥製たちが並んでいる。

「お父さん、これ見て！」。引き出しを開けてびっくりした子どもが親を呼ぶ。親子でわいわい歓声を上げ一緒に見ては話す。目の前に広がる、想像を超すおもしろさに自然と心がときめき、観察と発見を繰り返していく。まさにタイトルの通りの「観察と発見の生物学」だ。引き出しを開けて、自ら関わることで、おもしろさを増幅する。情報を「見せない」ことで感情を揺さぶるコミュニケーションのデザインこそ、自分たちが日々PLAY! MUSEUMで目指していることだった。

PLAY! MUSEUM は、2020年に東京・立川に生まれた民間が経営する美術館だ。東京にはたくさんの美術館・博物館があるが、日本では子どもも大人も美術館に行く習慣はまだまだ根付いていない。科博などの自然科学系の博物館（以下博物館と総称）と、絵画や現代美術などいわゆるファインアートを扱う美術館・博物館（以下美術館と総称）は、英語で言えばともに「MUSEUM」だが、収蔵や調査研究、展覧会のアプローチ手法はまったく異なる。博物館はコレクションを「資料」と呼び、類似資料を大量に集めることで比較研究を行い、科学技術が発展した未来の調査研究の下地を積み重ねる。博物館の展示室にいと、誰もがリラックスしていて、会場の中は雑然として、民主的なムードがある。一方美術館のコレクションは「作品」と呼ばれる。人間が生み出した唯一無二の価値を見出し、歴史的な事象や文脈から研究を重ね、体系を作り上げる。主観的で情緒的な文脈も重視される学問だ。一人一人が絵や彫刻と向き合い、想像する。そんな個人的で、静かな場所が美術館だ。「美術館は見識を高める場所、勉強する場所」。後発の美術館としては、そんな認識を少しでも変えたいと思っている。

PLAY! MUSEUMは民間の美術館なので、収支のバランスが生命線だ。そのため絵本や漫画など、広く親しみがあるコンテンツや、デザインや工芸など生活にも関わるテーマを取り上げている。新しい展示を行うことで、間口の広い、「ここは自分の居場所だ」と思えるようなポジティブな美術館体験を提供しようと日々努めている。

一つのお手本である「WHO ARE WE」を何とかPLAY! MUSEUMで開催したいと思った。科学的な調査に基づく博物館の資料展示と、アーティストの表現を伝える美術館の手法とを組み合わせれば、より奥行きのある画期的な展覧会が生まれると期待した。「WHO ARE WE」の狙いや考え方を咀嚼し、その延長線上に具体的な体験型企画案を置き、科博の担当者の皆さんにどきどきしながら提案した。予想以上に前向きに受け入れてくださって、新しい展覧会へのチャレンジが始まった。

子どもたちの目線を意識した「どうぶつ展」の体験型展示

では、PLAY! MUSEUMで開いた展覧会が実際にどんなものだったかを振り返りたい。展覧会のタイトルはテーマが

明快な「どうぶつ展」とし、「わたしたちはだれ？どこへむかうの？」というサブタイトルをつけた。「WHO ARE WE」で提示された人と哺乳類の不思議を、表現を通じてより遠くへ広げる意図からサブタイトルに疑問符を付した。

例えば「模様」をテーマにした体験型展示の場合。実はまだ解明されていない模様に関する展示を「どうぶつ展」では、アーティストの鈴木康広氏が、模様のない人が自発的にボーダーやドットを身にまったり、横断歩道などのサインなどに模様を活用したりする不思議に着目した。回転する球体にさまざまな模様をプロジェクションすると、さまざまに形が変わる。「模様の惑星」と名付けられた作品によって、普段は考えもしない人や動物と模様との、切っても切れない不思議な関係が目の前に広がった。

「笑顔の森」は、「WHO ARE WE」にはない新しい要素を追加した。おっぱいを飲む哺乳類にだけに備わる表情筋に着目し、写真家の横浪修と松原卓二の両氏に協力を仰ぎ、人や動物の笑顔で空間をいっぱいにし、鏡もあわせて設置することで来場者の笑顔すらも加わるようにした。



「どうぶつ展」
笑顔の森 会場写真 撮影：三部正博

「どうぶつ展」では、会場に足を運ぶであろう子どもたちの目線をもっとも意識した。動物が好きな科博に通うような子どもたち。あるいは親に連れられた未就学児たち。彼らが楽しめるような展示を作ることは最低限必要なことだった。

体験型展示の中で最もキャッチーだったのが「しっぽはすごい」だ。哺乳類のかわいらしいしっぽには実はそれぞれ機能がある、ということを紹介するために、インタラクティブな装置をsiro Inc.が作った。座るとセンサーが反応して、おしりの部分からしっぽのように長い紙が出てくる。紙には動物のしっぽのイラストと解説、さらには英語や中国語で慣用句が書かれていて、38種類から何が出るかはお楽しみだ。仮に、「哺乳類のしっぽの機能を学ぼう！」というパネルがあり、写真とテキストが楽しくレイアウトされていても、わくわくはしない。でも「しっぽはすごい」なら、おもしろく

自然に学ぶことができる。偶然性の遊びと知識の拡張性を加えた体験型展示の面目躍如だ。

展覧会の前日、スタッフ5人が同時に椅子に座ってしっぽを出す動画をInstagramに投稿すると瞬く間に2日間で500万回の再生を記録し、期待以上のコンテンツの力に目を見張り、SNSのパワーを思い知った。



「どうぶつ展」
しっぽはすごい 会場写真 撮影：三部正博

新たな親子層を獲得するための広報活動

PLAY! MUSEUMには、専従の広報担当者が2人いる。普段は印刷物の配布、SNSやウェブサイトでの告知、プレスリリースによるパブリシティを中心に広報活動をしている。「どうぶつ展」は「親子」がメインターゲットで、科博が好きな子どもたちやファミリーにいかん足運んでもらうかが課題だった。科博に通う親子をイメージしたアプローチとして考えたのが、「どうぶつMAP」の制作と配布だった。上野動物園、多摩動物公園といった動物園のほか、葛西臨海水族園、JRA競馬博物館、それに動物の名のつく飲食店や雑貨店まで、バラエティのある14の施設や店をチョイスし、周遊マップを作って各所で配布してもらった。

そのほか、オーディオテクニカの協力で、鑑賞体験を助け

るサービス「『ながら聴き』音声ガイド」を無料で提供した。室内を歩き、鑑賞や体験をする間に、動物たちの鳴き声や解説、詩が偶然聞こえてくる、そんな実験的な試みだった。

バズっても伸びない

充実した企画、ターゲットに即した広報活動にもかかわらず、来場者数は伸び悩んだ。科博とPLAY! MUSEUMの共同企画による豪華な内容は、『美術手帖』をはじめメディアの取材もそこそこあり、SNSでも500万回再生の「しっぽはすごい」をはじめ反応はよかった。それでも客足は伸びなかった。

なぜ来場に結びつかなかったのかを振り返ると、一つは、何が売りなのかははっきり見えなかったのではないと思う。剥製を鑑賞するのか、「WHO ARE WE」を見て人と動物の不思議をおもしろがるのか。はたまた、PLAY! MUSEUMらしい追加展示を体験して楽しむのか。キービジュアルを作るにあたって何をメインにするかで相当苦労した。来場者もまた同じように迷ってしまったようだった。

もう一つは、一連の問いかけや体験の先に、何があるのかわかりづかったように思う。今の人たちは「だからどうなるの?」という結論を割とすぐに求めているようにも思う。

展示に対する来場者の反応

それでも足を運んでくれた方々は一様に楽しんでくれたようだった。子どもたちはいつも「WHO ARE WE」で引き出しを開けるたびに目が輝き、体験エリアはめいめいが好きなように楽しんでた。ヨーロッパやアジアからの来客を案内する機会もあり、画期的なコンセプトと多様な展示品に驚きを隠さなかった。日本人は近年「見たことがあるもの」を好む傾向が強まっていて、「見たことのないもの」を敬遠する傾向が強まっているようにも感じる。海外の来場者の様子と比較したとき、そんなことを感じざるを得なかった。

PLAY! MUSEUMは、博物館とのコラボレーションを通じて、大きな驚きと発見、励ましを得た。博物館的な視点や大らかさを加えながら、人々の好奇心を喚起する面白い展覧会作りに、これからもチャレンジを続けていきたい。



どうぶつMAP

～新たな層の獲得に向けた取り組み～

月に1度、大人のためのナイトミュージアム「夜の科学館」

浜松科学館
上野 元嗣

1. はじめに

浜松科学館は2026年5月に開館40周年を迎え、全面リニューアルした2019年以降は、年間17万人以上が来館している。来館者の多くは小学校低学年の親子層であり、高校生以上の来館者、大人のみで来館する利用者は多くはない。2023年に浜松市が市民モニターを対象に実施したアンケートでは、当館に来館したことがないと回答した人に対してその理由を尋ねたところ、「子ども向けの施設だから」が最多であった。この結果からも、「科学館は子どものための施設」というイメージが依然として根強いことがうかがえる。

多くの科学館では、学校利用や親子利用が来館者の中心となっている一方で、生涯学習施設としての役割が期待される中、高校生以上の来館者や大人のリピーターをいかに増やしていくかが共通の課題となっている。当館でも同様の課題意識を持ち、その解決策の一つとして、2020年度より大人を対象とした夜間開館事業「夜の科学館」を開始した。その取り組みの経緯と成果、そして今後の展望について報告する。

2. 大人のための夜間開館の開始

2020年度より、夜の科学館を開催した。初年度から、2023年までは以下のような内容を提供した。

開催日	2020年7月～2023年3月 毎月第3金曜日
時 間	17:01～19:30
内 容	常設展の開放 特別プラネタリウム サイエンスショー でんけんラボ ワークショップ ミュージアムショップ

特徴的なプログラムは、プラネタリウムとサイエンスショーである。

プラネタリウムでは「STAR FLIGHT」と題し、毎月異なる国の星空や風景を紹介する職員制作の生解説番組を放映した。来館者にはオリジナルパスポートを配布し、スタンプラリー形式とすることでリピーター獲得につなげた。

サイエンスショーでは、プラネタリウムで取り上げる国に合わせてテーマを設定し、実験を交えたショー形式で展開した。例えば、オーストラリアを取り上げた際には、ブーメランをテーマとした。サイエンスショーでは体験や驚きを重視することが多いが、夜の科学館では現象理解を重視し、浮力や揚力、ジャイロ効果といった専門用語や模式図も用いながら、「なぜそうなるのか」を掘り下げて解説した。一方で苦労したのは、取り上げる国や地域と科学的なテーマをどのよ

うに結び付けるかであった。ボリビアのウユニ塩湖をプラネタリウムで扱った際には、ショーのテーマを「塩」とした。必ずしも自然な展開とは言えない部分もあったが、身近な題材を科学的に掘り下げる内容は、大人の来館者から好意的な評価を得た。

このような工夫の結果、夜の科学館は月平均約200人の来館者を集める事業へと成長した。毎月の開催を楽しみに来館する常連も増えてきた。

3. テーマ型プログラムへの転換

一方で、もっと多くのプログラムを楽しみたい、さらなるファン層を増やしたいとの思いから、プログラムの改善を行った。開催日時を第3金曜日から第2金曜日へ、閉館時間を19:30から20:00と30分延長して実施した。

最も大きな変更は、館全体で共通テーマを設け、全プログラムで展開、一体的に学びを深めてもらえるようにしたことである。「科学そのもの」ではなく「来館者が興味を持つ事象」を起点とした。科学への関心が高い層だけでなく、普段科学館を利用しない層にも参加してもらうことを目的とした。

各月のテーマは以下の通りである。

月	2023年度	2024年度	2025年度大テーマ 「日本文化と科学」
4	歴史	嘘	まつり
5	世界	コレクション	お茶
6	性	時	漫画
7	食	波	和食
8	光	妖怪	ゲーム
9	いにしえ	スポーツ	建物
10	音楽	毒	香り
11	身体	ファッション	装い
12	空	掃除	ことば
1	旅	酒	音楽
2	テクノロジー	恋	道
3	暮らし	旅	江戸

例えば、2025年5月のテーマ「お茶」では、茶畑の星空を紹介するプラネタリウム、お茶の性質や香りを扱うサイエンスショー、利き茶体験、茶葉の電子顕微鏡観察、関連商品の販売を実施した。テーマを共有することで、来館者が多角的に学べる構成とした。

さらに、常設展示をより深く理解してもらうことを目的として、展示の使い方だけではなく、背景や身の回りでどのように活用されているかを解説する「展示ガイド」も実施した。



4. 事業の成果と外部評価

過去のテーマにおいて、特に反響が大きかったのは「性」であった。科学館では扱いづらいテーマと思われがちだが、生物学・文化・神話など複数の切り口を持つため、大人の知的好奇心を喚起しやすかったと考えられる。プラネタリウムはギリシャ神話、サイエンスショーはサイエンストークとして生物の繁殖戦略、ワークショップは、植物の受粉戦略をイメージしたポストカードづくりを実施した。大人向けは決して「難しいこと」を提供する場ではなく、「理解する楽しさ」を提供することであったと感じている。

こうした取り組みが評価され、2025年8月のNIKKEIプラス1「何でもランキング 科学館 大人もワクワク学び直し」において全国2位に選出された。

5. 持続可能な事業を目指して

一方で、課題もある。まず、職員の勤務負担である。夜間開館は通常の開館時間外で実施するため、職員にとっては残業や業務負担の増加につながる。この点については、時間差勤務の導入など、勤務体制を調整しながら運営している。

また、継続実施に伴うコンテンツ開発の負担も大きい。毎月新たなテーマを設定し、それに合わせてプラネタリウム番組やサイエンスショー、ワークショップ等を制作することには相応の労力を要する。一方で、来館者アンケートでは「一度だけの実施ではもったいない」「過去のテーマをもう一度見たい」といった意見も寄せられていた。そこで2026年度からは、これまでのような年間テーマを設けず、話題性のある題材を柔軟に取り上げるほか、過去に好評だったプログラムのリバイバルやリメイクも実施することとした。これにより、来館者のニーズに応えるとともに、実施者側の企画の自由度や持続可能性の向上も図っている。

さらに、より幅広い層に参加してもらうことを目的として、開催日を金曜日から土曜日へ変更した。併せて、館内で営業しているカフェ事業者にも協力を依頼し、開催日に営業を行ってもらっている。科学を学び、楽しむ場であることに変わりはないが、それに加えて、大人がゆっくりと科学館自体を楽しみ、思い思いの時間を過ごせる空間づくりへと舵を切っている。



6. おわりに

手探りで始めた本事業であるが、来館者の様子を見てみると、それぞれのスタイルで科学館を楽しみ、職員や来館者同士で交流して過ごしている姿が印象的である。

本事業を通じて、大人向けプログラムは単に開館時間を夜に延長するだけでは成立せず、「大人だからこそ知りたい内容」や「大人同士で共有したくなる体験」を意識して設計することが重要であることを実感した。また、科学そのものを前面に押し出すのではなく、文化や歴史、趣味といった身近なテーマを入口として科学へ導くアプローチも有効であった。

当館は「誰もが楽しめる科学館」を目指して事業を展開している。夜の科学館の取り組みは、その理念を大人へと広げる試みでもある。大人が気兼ねなく科学を楽しみ、学び、くつろげる空間を提供することが、新たな来館者層の獲得やリピーターの創出につながっているのではないだろうか。今後も試行錯誤を重ねながら、科学館に足を運ぶきっかけを広げ、多様な人々が科学と出会える場づくりを続けていきたい。

参考文献

1. 浜松科学館紀要第2号（2023年度）『夜の科学館～大人が楽しむ科学館～』
2. 浜松科学館紀要第2号（2023年度）『2023年度夜の科学館 展示解説ツアーの実施』

空間創造によって
人々に「歓びと感動」
を届ける

株式会社 乃村工藝社

東京都港区台場2丁目3番4号 TEL: 03-5962-1171 (代表)



■ 移転・新設

米EPIC発見館が開館（2026年6月）

2026年6月5日に、ネブラスカ州中央部のやや南東にあるグランドアイランド（都市圏人口：78,000人）で、新しい子ども科学館が開館した。同館の名称は、EPIC発見館（EPIC Discovery Center）。新しい施設は、2021年に市内の別の場所に開館した、グランドアイランド子ども博物館を前身としている。EPICとは、「Explore Possibilities可能性を探究し、Inspire Creativity創造性を刺激する」を意味している。乳幼児から18歳までの青少年を対象に、体験学習型の展示（全250台）と関連の活動を通じて、科学、技術、エンジニアリング、算数と数学の原理に触れてもらい、考える力を育成することが目的になっている。同館は、市内のライダー公園に残されていた、州兵の古い装備保管庫の建物を改築して設けられた。総整備費は、1億3,500万ドル。同館は、施設を所有するグランドアイランド市から、10年間のリース契約で借り受けている。

EPIC Discovery Center. Grand Island, Nebraska.

<https://www.epicdiscovery.org/about>

<https://www.youtube.com/watch?v=fEmo0gDR54U>

■ 常設展

米カリフォルニア科学館で、航空宇宙展示館をオープンへ（2026年11月予定）

2026年11月13日に、ロサンゼルス（都市圏人口：1,830万人）にあるカリフォルニア科学館で、サミュエル・オーシン航空宇宙センターがオープンする予定だ。約17,000㎡の広さをもった、この新しい常設展示館は、カリフォルニア科学館の本館の東側にすでに完成。歴史的な航空宇宙関連の展示品（100点以上）やスペースシャトル「エンデバー」が展示されることになっている。展示ホールとしては、「サミュエル・オーシン・シャトル・ギャラリー」、「大韓航空航空ギャラリー」、「ケント・クレサ宇宙ギャラリー」が設けられる。サミュエル・オーシン・シャトル・ギャラリーでは、エンデバー号が固体ロケットブースターと外部燃料タンクを完備した「打ち上げ準備完了」の垂直姿勢で展示される。観覧者は、エンデバー号の機首上にあるガラス張りのプラットフォームから壮観な景色を眺めるために、高さ約61メートル（20階建て相当）まで上がる、「ガントリー・エレベーター」に乗ったり、特別な視点からシャトルを体験することができる。4億5千万ドルの整備費のうち、2500万ドルがサミュエル・オーシン財団から寄付された。オハイオ州出身のサミュエル・オー

シン（1914～2003）は、長くロサンゼルスを拠点に、広く製造業から不動産業まで手がけた実業家で、彼が生前に設立した財団を通じて、科学、天文学、文化施設に多くの寄付を提供している。同財団からの寄付を受けて整備されたものには、以下のものがある。グリフィス天文台のサミュエル・オーシン・プラネタリウム；氷河期の化石を多く所蔵したラ・ブレア天然タール池博物館；パロマー天文台にある口径122cmのサミュエル・オーシン望遠鏡など。

Samuel Oschin Air and Space Center.

California Science Center. Los Angeles, California.

<https://californiasciencecenter.org/press-room/document/2025-11-19/samuel-oschin-air-and-space-center-architectural-fact-sheet>

<https://www.youtube.com/watch?v=2NQ1toK0aRo>

米アラスカ大学北方博物館で、プラネタリウムを新設（2026年4月）

2026年4月25日に、アラスカ州はフェアバンクス（都市圏人口：9.7万人）にある、アラスカ大学北方博物館で新しいプラネタリウムがオープンした。65席を備えたこの施設には、直径11メートルのドーム、高解像度投影システム、劇場級の音響設備が導入された。プラネタリウムは、整備費740万ドルの寄付を提供した、歯科矯正医ウォルト・バブラ夫妻（フェアバンクス在住）の名を冠して、「ウォルト&マリタ・バブラ・プラネタリウム」と名づけられた。

Walt and Marita Babula Planetarium.

University of Alaska Museum of the North. Fairbanks, Alaska.

<https://www.uaf.edu/museum/planetarium/>

<https://www.alaska.edu/news/system/2026-new-planetarium-at-uaf-museum-of-the-north.php>

https://www.youtube.com/watch?v=E22wHoCJ_iw&t=9s

■ 企画展・特別展

英ケンブリッジ大学セジウィック地球科学博物館で、「マグマからマグネットまで」展を開催

2026年2月27日に、ケンブリッジ（都市圏人口：31万人）にあるケンブリッジ大学のセジウィック地球科学博物館で、「マグマからマグネットまで」展と題した企画展が開幕した。同展は、グリーンランドの地下に眠る豊富な地下資源について紹介したものだ。

2025年にメディアで大きく報道されたことだが、アメ

リカのトランプ大統領は金と引き換えにグリーンランドの領有を強く求めた。それはロシアと中国への警戒とグリーンランドの豊富な地下資源を狙った野望であり、強く反発したグリーンランド自治政府とグリーンランドを自治領としているデンマーク（アメリカと同じNATOの加盟国）を札束で揺さぶっている。ケンブリッジはイギリスの都市のなかで、ケンブリッジ大学を中心に学生と研究者の多くが反トランプの傾向が強い場所として知られており、2018年にトランプ米大統領がイギリスを公式訪問したとき、市内で大規模な抗議デモが開催された。担当学芸員：Dr. Carrie Soderman, Professor Owen Weller-Gibbs, Dr. Corinne Frigo。「マグマからマグネットまで」展の会期：2027年3月2日まで。

From Magma to Magnets.

Cambridge University Sedgwick Museum of Earth Sciences. Cambridge, Cambridgeshire.

<https://www.museums.cam.ac.uk/events/magma-magnets>

<https://www.cam.ac.uk/stories/cambridge-exhibition-greenland-rare-earth-elements>

<https://www.esc.cam.ac.uk/news/show-force-magma-magnets-exhibition-lets-visitors-test-their-strength-against-greenlands-rare>

米ミネソタ大学ベル自然史博物館で、「不思議な共生関係：菌類、寄生生物、肉食動物における関係性の探求」展を開催

2025年9月27日から2026年1月4日まで、ミネソタ州は州都セントポール（都市圏人口：375万人）にあるミネソタ大学のベル自然史博物館で、「不思議な共生関係：菌類、寄生生物、肉食動物における関係性の探求」展が開催された。同展は、ニューヨーク植物園が米国植物画家協会と共同で企画した巡回展である。展示では、現代の植物画作品50点を使って、共生する生物たちの隠された相互につながった世界が紹介された。作品には9カ国のアーティストたち（44人）によって、地衣類、菌類、寄生植物や食虫植物が描かれており、地衣類における菌類と藻類の連携など、さまざまな生物がどのように協力し合い、多様な生態系の中で生き残り、繁栄しているかが紹介された。日本からは、池田真理子、石川美枝子、榎戸晶子、原田洋子、菱木明日香の作品が出品された。また地元のミネソタ大学植物標本館と生物科学温室からも標本が出品された。

同展は、企画開発したニューヨーク植物園で、最初に2024年5月18日から2024年10月27日まで開催され、次にアリゾナ州ツーソンにあるツーソン植物園で、2025年1月18日から2025年6月30日まで開催された。ベル自然史博物館での開催のあと、コロラド州デンバーにあるデンバー植物園（会期：2026年9月26日～2027年1月31日）など3館に巡回される予定だ。

Curious Companions: Fungi, Parasites and Carnivores.

University of Minnesota Bell Museum. St. Paul, Minnesota.

<https://www.bellmuseum.umn.edu/curious-allies/>

米ミネソタ大学ベル自然史博物館で、パネル展「天体物理学の知られていない物語」を開催

2026年7月7日から2026年8月30日までミネソタ大学ベル自然史博物館で、「隠された真実：影に隠された科学の物語に光を当てる」という、期間限定のパネル展示が開催された。このパネル展示では、天体物理学を中心に、科学の発展に貢献してきた、過去および現在の女性やBIPOC（Black=黒人 / Indigenous=先住民族 / People of Color=有色人種）の科学者たちの業績が紹介された。このなかには、アメリカ航空宇宙局の初の黒人の管理職ドロシー・ヴォーン博士（数学）や、黒人の天体物理学者のハキーム・オルセイ博士（太平洋天文学会専務理事）の業績、そしてモンタナ州からカナダのアルバータ州にまたがって昔から住む先住民族のブラックフット族のユニークな宇宙観が紹介された。

Hidden No More: Shedding Light on Science Stories in the Shadow.

University of Minnesota Bell Museum. St. Paul, Minnesota.

<https://www.bellmuseum.umn.edu/hidden-no-more-pop-up-exhibit/>

英ロンドン科学博物館で、南米パンタナール湿地帯の火災展を開催

2026年2月6日から2026年5月31日まで、ロンドン（都市圏人口：1,540万人）にあるロンドン科学博物館で、「水・パンタナール・火」と題した写真展が開催された。ブラジル、ボリビア、パラグアイにまたがるパンタナール湿地帯は、ジャガーやホエザルなどの哺乳類、そして数多くの魚類や鳥類を含む、広大かつ独自の生物多様性の宝庫である（参考：岩合光昭著『PANTANAL パンタナール』クレヴィス、2020年発行）。しかし、この驚くべき生態系は現在、森林伐採、集約農業、気候変動の脅威にさらされており、これらすべてが相まって、近年この湿地帯を荒廃させた壊滅的な干ばつや山火事の一因となっている。同展では、写真家のラロ・デ・アルメイダとルチアーノ・カンディサーニによる写真作品（60点）で、パンタナール湿地帯の息をのむような美しさと、現在直面している壊滅的な被害の両方が紹介された。企画：Eder Chiodetto（サンパウロを拠点に活動しているブラジルの写真家）。

Water Pantanal Fire.

Science Museum. London.

<https://www.sciencemuseum.org.uk/what-was-on/water-pantanal-fire>

<https://lalodealmeida.com.br/>

<https://lucianocandisani.com/en/>

List of special
exhibition!

9月10月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
あすなろ会子ども遊学館 (釧路市子ども遊学館)	宇宙月間	9月1日～9月30日
	遊びんピック	10月10日～10月12日
岩手県立博物館	テーマ展「化石のレプリカ展 ― We are NOT fakes! ―」	9月26日～12月6日
奥州市牛の博物館	第34回企画展「運ぶ ―畜力が物流を支えた時代―」	7月18日～10月18日
高柳電設工業スペースパーク (郡山市ふれあい科学館)	ホワイエ企画展「中垣哲也 オーロラ展」	9月5日～11月15日
	鉄道の日「鉄道フェスティバル」	10月10日～10月12日
産業技術総合研究所 地質標本館	特別展「第四紀 ―過去・現在・未来をつなぐ地質時代―」	6月30日～10月25日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	第95回企画展「あつまれ!海の骨なし動物 ―めっちゃ不思議で多様なすがた―」	7月18日～9月27日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	ミニ企画展示「Skill is Magic! 技能五輪」	10月3日～11月23日
栃木県立博物館	テーマ展「とちぎの四季のキノコ」	6月13日～9月23日
	企画展「動物 からだくらべ」～自分とくらべてみよう～	7月18日～9月23日
	テーマ展「『石のまち』大谷 ～大谷石文化のストーリー～」	7月18日～9月23日
	企画展「もっと知りたい!とちぎの宝 ～デジタルで広がる新たな魅力～」	10月17日～11月29日
群馬県立自然史博物館	開館30周年記念企画展(第74回)「北米ジュラ紀の恐竜たち」前期	7月18日～9月13日
	開館30周年記念企画展(第74回)「北米ジュラ紀の恐竜たち」後期	9月19日～12月6日
埼玉県立自然の博物館	トピック展「カラフルサマーバード!」	6月16日～10月4日
	特別展「古秩父湾 ―秩父盆地の海獣の海―」	6月27日～10月12日
千葉県立中央博物館	生態園トビックス展「イモムシ・毛虫」	6月27日～9月27日
	特別展「ちば恐竜博 ―驚異の捕食者(ハンター)たち―」	7月11日～9月27日
	秋の展示「ジオパーク巡回展 地球時間の旅」	10月17日～12月13日
	トビックス展「東日本大震災15年「災害を記録して伝える」」	10月20日～12月13日
	生態園トビックス展「どんぐりと松ぼっくり」	10月31日～2027年5月30日
港区立みなと科学館	2026 夏の企画展「海の生きもののカタチ」	7月15日～9月13日
	2026 秋の企画展 「デジタルでみる身近な生きものの世界 東京自然いきもの展」	9月16日～11月8日
	子どもとつくるミニ企画展 身近な自然を調べよう	9月16日～11月8日
国立科学博物館	特別展「いきもの超ワールド展 国立科学博物館×ダーウィンが来た!」	7月11日～10月12日
	国立科学博物館×総合地球環境学研究所 共同企画展 「どうする、ニンゲン ―研究の現場から地球の未来を問う」	7月31日～9月23日
	野口英世生誕150年記念企画展「感染症への挑戦:過去・現在・未来」	10月27日～2027年2月28日
	特別展「生きものたちの性」	10月31日～2027年2月21日
たばこと塩の博物館	新収蔵ミニチュア展 ―名人小林礫斎を支えた二人の中田	9月26日～12月20日
府中市郷土の森博物館	特別展「フチュウで はたらく ウチュウ人」	7月25日～10月4日
神奈川県立生命の星・ 地球博物館	特別展「しらべて分かった!里山にくらす動物たち」	7月18日～11月8日
富山県 立山博物館	開館35周年・前期特別企画展「立山地獄めぐり」	7月18日～9月6日
	開館35周年・後期特別企画展「立山黒部を貫く! ―電源開発と観光―」	9月19日～11月8日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開 催 館	展 覧 会 名	開 催 期 間
富山市科学博物館	企画展「ふしぎいっぱい自然と科学」	9月12日～10月7日
のとじま水族館	生きものたちの衣・食・住展	5月21日～9月28日
岐阜県博物館	開館50周年記念特別展 Minerals ―永遠の美―	9月18日～11月29日
中津川市鉱物博物館	第33回企画展「さび石 ―鉄が織りなす石の世界―	7月18日～12月20日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	10/100展(前期)	6月19日～11月3日
	小泉八雲が愛した小さな生きもの	6月19日～11月3日
鳳来寺山自然科学博物館	夏の特別展「虫を食べるきのこ 冬虫夏草展」	6月27日～9月6日
	初秋の特別展「きのこ展」	9月21日～9月23日
	秋・冬の特別展「心の器 ―鳳来寺硯」	10月25日～2027年2月7日
豊橋市自然史博物館	ギョギョッとサカナ★スター展	7月3日～9月6日
トヨタ産業技術記念館	企画展「クルマの材料技術」	9月25日～2027年2月28日
	企画展「華ひらくジャポニスム ～技術と文化の文明開化～」	10月3日～12月13日
名古屋科学館	特別展「スケスケ展2 ～スケると見える仕組みの世界～」	7月18日～9月23日
三重県総合博物館	第44回企画展「WHO ARE WE 観察と発見の生物学」 国立科学博物館収蔵庫コレクション Vol.1 哺乳類	7月11日～9月27日
滋賀県立琵琶湖博物館	琵琶湖博物館30周年記念企画展示 「博物館はタイムマシン ―魚類学者がみた琵琶湖―」	7月18日～11月23日
	水族企画展示「シーボルトの江戸参府と日本の淡水魚」	7月18日～11月23日
大阪市立科学館	企画展「月から火星へ 宇宙探査におけるイタリア」	9月19日～10月25日
	企画展「カブラ展」	9月19日～10月25日
高槻市立自然博物館 (あくあびあ芥川)	企画展 高槻のダンゴムシ	7月4日～9月27日
明石市立天文科学館	はじめ展 ～時と宇宙と人をつなぐモノガタリ～	7月30日～12月6日
	夏休み・児童生徒理科作品展 ～小学生の部～	9月12日～9月27日
	夏休み・児童生徒理科作品展 ～中学生の部～	10月3日～10月18日
鳥取県立博物館	企画展「名和長年とその一族 ―今につながる700年の軌跡―」	10月31日～11月29日
出雲科学館	企画展「電池～ためて使う電気の入れ物～」	10月10日～11月8日
島根県立三瓶自然館	海竜大進化 ～恐竜時代の蒼き海へ～	7月11日～9月27日
倉敷市立自然史博物館	第35回特別展「自然にひそむアブナイやつら」	7月18日～9月23日
	特別陳列「令和8年度倉敷市児童生徒自然史標本作品展」	9月26日～10月11日
笠岡市立カブトガニ博物館	特別展示「GATAMON ～干潟のいきもん～」展	7月18日～9月27日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	企画展 わたしのからだ 骨と筋肉 元気もりもり	7月18日～11月23日
ヌマジ交通ミュージアム (広島市交通科学館)	絵本『クルマザウルスたんけんたい』×ヌマジ交通ミュージアム クルマザウルス大集合！	7月17日～9月6日
	秋季企画展「橋のキセキ」	10月9日～11月29日
北九州市立自然史・歴史博物館	夏の特別展「とぶ 空を旅する生きものたちの大冒険」	7月18日～9月23日
	企画展「レジェンドランナー 君原健二とオリンピック」	8月29日～2027年1月17日
	秋の特別展 「昭和100年 おもちゃと暮らしの大博覧会 タイムトラベル北九州」	10月24日～2027年1月11日
天草市立御所浦恐竜の島博物館	特別展「モササウルスと海の古代生物」	7月18日～9月23日
宮崎県総合博物館	旅するみやざき展 ～出かけよう、宮崎の記憶をたどる6つの旅へ～	10月17日～11月30日

※次号(11月号)に掲載の11月12月の特別展情報は9月20日(日)までにお寄せください。

… 事務局から助成事業のご案内 …

令和8年度学芸員専門研修アドバンスト・コース参加者への助成

令和8年11月10日（火）から13日（金）まで国立科学博物館筑波研究施設で学芸員専門研修アドバンスト・コースを実施する予定です。受講料は無料で、正会員施設に所属する受講者は上限5万円の交通費等の助成を受けることができます。



応募締切：9月6日（日）

詳細は国立科学博物館ホームページをご確認ください。

国立科学博物館HP：

<https://www.kahaku.go.jp/gakushu/gakko/gakugei.html#advanced>



令和8年度海外科学系博物館視察研修

令和9年1月中旬頃にタイにおける海外科学系博物館視察研修を実施する予定です。今年度も、正会員施設に所属する参加者には研修費の助成を行います。



募集時期：9月中旬～10月中旬〆切（詳細は、後日ご案内します。）

海外の科学系博物館の展示や運営手法等を学ぶ貴重な機会となりますので、多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

研究発表大会発表者への助成

令和9年2月18日（木）に東日本大震災・原子力災害伝承館において、第34回研究発表大会を開催します。今年度も、正会員施設に所属する発表者（口頭発表・ポスター発表）は交通費等の助成を受けることができます。発表の応募の際に、併せてお申し込みください。



募集時期：9月下旬～10月下旬〆切（詳細は、後日ご案内します。）

日頃の調査研究や事業活動の成果を共有いただく機会として、多くの皆さまからのご応募をお待ちしております。



丹青社は今年、創業80周年をむかえます。



空間づくりのプロフェッショナル
株式会社 丹青社

東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL 03-6455-8100（代表）URL www.tanseisha.co.jp
札幌・仙台・横浜・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



since 1974

地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL 03(3354)0131（代表）◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL 03-3350-6725 FAX 03-3350-6745
<http://www.tokyo-science.co.jp>
E-mail: info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

航空科学博物館

Museum of Aeronautical Sciences

〒289-1608

千葉県山武郡芝山町岩山111-3

<https://www.aeromuseum.or.jp/>

航空科学博物館は、日本初の総合的な航空思想普及施設として、1989年(平成元年)8月の開館以来、日本国内外より、数多くの方々にご来館をいただいております。成田空港隣接地である千葉県山武郡芝山町・スカイパークしばやまに位置し、日本を代表する航空拠点である成田空港とともに、歴史を刻んできました。

当館を象徴する展示機体は戦後の航空産業の礎を築いたYS-11試作1号機です。現在、このYS-11は永続的な保存に向けて、実機を用いた調査研究を進めております。

成田空港を望む眺望や館内には実物のエンジンやコックピットを見ながら学ぶことができる展示、フライトシミュレーターやボーイング747の機首部分に実際に入りながら解説を聞くことができるSec.41 ツアーガイド(どちらも有料・先着整理券)などが楽しめるなど、見どころ満載の体験型博物館です。



航空科学博物館外観



YS-11試作1号機



Sec.41(セクション41)

※次号(11月号)に掲載のリニューアル情報は9月10日(木)までにお寄せください。

KONICA MINOLTA Giving Shape to Ideas

DYNAVISON-LED
LED DOME SYSTEM

革新的なテクノロジーを結集した
新しいLED映像システムで
リアルな臨場感と美しい映像体験を

QRコード

コニカミノルタプラネタリウム 製品 検索

コニカミノルタプラネタリウム PLANETARIA YOKOHAMA

Panasonic
CONNECT

天文遺産・旧倉敷天文台スライディンググループ観測室



倉敷科学センター公式HP
<https://kurakagaku.jp/>

全国には市民に開かれた天文台「公開天文台」が300カ所以上あって、日本は世界有数の天文台大国となっています。その第1号が1926年創設でちょうど100周年を迎える「倉敷天文台」です。大正時代に「民衆への科学普及」を理念に掲げ、イギリス製の反射望遠鏡が設置されていた観測室は、天文学史上の貴重な遺産として、国の登録有形文化財、日本天文学会の日本天文遺産にも登録されており、現在、当館敷地内に移築、保存されています。



次回執筆者は、明石市立天文科学館 学芸員 沖中 あゆみさんです。

令和8年度 東レ理科教育賞の募集

【東レ理科教育賞】

◆対象：東レ理科教育賞は、理科教育を人間形成の一環として位置づけた上で、中学校・高等学校レベルでの理科教育における新しい発想と工夫考案にもとづいた教育事例を対象としています。論説や提案だけではなく、教育の現場で実績のあるものを期待しています。生徒の科学に対する興味を深めるために、例えば次のような事項が考えられます。

- (1) 実験・観察、演示などの教材・教具の開発とその実践例。
- (2) 効果的な実験法、器材の活用法、自発的学習をうながす工夫など。
- (3) よりよい理科教育のための指導展開。

◆応募資格：中学校・高等学校の理科教育を担当、指導、または研究する方。

◆締切日：令和8年9月30日(水) 必着

詳細は公益財団法人東レ科学振興会のホームページ(<https://www.toray-sf.or.jp/awards/education/>)をご確認ください。

全科協ニュース編集委員

笠松 舞(新江ノ島水族館 なぎさの体験学習館チーフキュレーター)
筋野 美穂(多摩六都科学館学芸員)
平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(特命参事))
弘田 澄人(川崎市青少年科学館(かわさき宙と緑の科学館)天文担当係長)
丸山 啓志(千葉県立中央博物館研究員)
望月 貴史(岩手県立博物館専門学芸員)
関根 則幸(国立科学博物館学習支援部広報・連携課長)

全科協事務局

国立科学博物館
学習支援部 広報・連携課
(担当:登島・斉藤・清水)
TEL 03-5814-9171
info@jcsmj.jp
発行日 2026年9月1日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社